

東京湾東岸の貝塚の特質 (別添資料)

1 遺跡数と貝塚数統計

(1) 全国の遺跡数と密度

地方別縄文遺跡数および遺跡密度(/1000km)
枝村・熊谷2009を改変。全国の密度は表から算出

地方	全国	東北	関東	北陸	中部 山国	東海	近畿	中国	四国	九州
遺跡数	27563	6542	10852	824	1257	2748	1235	1004	169	2932
面積	283.53	64.14	32.14	22.09	27.03	12.45	32.93	31.77	18.78	42.19
遺跡密度	97.2	102.0	337.6	37.3	46.5	220.7	37.5	31.6	9.0	69.5

(2) 全国・関東地方の貝塚数

全国			関東地方		
関東	1659	61.7%	千葉	763	46.0%
東北	514	19.1%	茨城	404	24.4%
九州	138	5.1%	神奈川	186	11.2%
東海	109	4.1%	東京	161	9.7%
沖縄	104	3.9%	埼玉	123	7.4%
北海道	80	3.0%	栃木	13	0.8%
中国	44	1.6%	群馬	9	0.5%
北陸	15	0.6%	合計	1659	100.0%
近畿	14	0.5%			
四国	11	0.4%			
合計	2688	100.0%			

(3) 県内水系大区分別集計

「千葉貝塚 DB」の集計では全体で717か所のうち、水系別では、東京湾 486 (67.8%)、古鬼怒湾 150 (20.9%)、九十九里 81 (11.3%)となる。

(4) 県内市町村別集計

千葉県内市町村別縄文貝塚数

(10か所以上の市町村。1999年のデータを現在の市町村で集計)

市町村名	貝塚数	順位1	大型	順位2	面積km ²	密度	順位3
千葉市	112	1	33	1	272.08	0.412	7
松戸市	62	2	9	4	61.33	1.011	1
市原市	59	3	14	2	368.20	0.160	13
市川市	55	4	7	5	57.40	0.958	2
柏市	46	5			114.90	0.400	8
野田市	44	6	12	3	103.54	0.425	6
船橋市	34	7	2	8	85.64	0.397	9
流山市	26	8	3	7	35.28	0.737	4
香取市	26	8	5	6	262.31	0.099	17
成田市	18	10			213.84	0.084	18
我孫子市	17	11			43.19	0.394	10
匝瑳市	17	11			101.78	0.167	11
鎌ヶ谷市	16	13	1	11	21.11	0.758	3
印西市	14	14			123.80	0.113	15
佐倉市	13	15			103.59	0.125	14
横芝光町	11	16	1	11	66.91	0.164	12
習志野市	10	17	2	8	20.99	0.476	5
袖ヶ浦市	10	17	1	11	94.92	0.105	16
他の市町村	98				(25 市町村)		
全体	688	か所					

数では千葉市がもっとも多いが、面積当たりの数では松戸市、市川市、鎌ヶ谷市、流山市の順になり、東葛地区に軍配があがる。これらの市町村は内陸部が少なく、貝塚の空白地が狭いこと、また、早・前期の小規模な貝塚が多いことによる。大型貝塚の数は千葉市が圧倒的に多く、次いで市原市が多い。大型貝塚の分布は都川・村田川水系が中心といえる。

2 千葉県水系区分と各地の貝塚形成

千葉県教育振興財団『研究紀要 19』所収の千葉県内貝塚分布地図・地名表を作成した際に、以下のように水系を区分し名称をつけた。貝塚用のものであり、内陸や貝塚の存在しない沿岸部は区分がない。

(1) 3つの大区分

I：東京湾区、II：古鬼怒湾区、III：太平洋区に分けられる。

(2) 中区分

東京湾水系のみの区分を示す。

I. 東京湾区

I A. 奥東京湾中央部 海進最盛期に最大となった奥東京湾の中央付近である。海退がすすんだ中期以降には湾奥部となる。なお、湾岸の一部は江戸期の江戸川掘削によって切り離され、埼玉県に属しているが、本来は地続きである。当地域の貝塚の半数近くがここにあり、除外できない。この地域では貝種組成がハマグリ主体にならない。砂底の前浜干潟は形成されず、泥の混じる河口干潟のみであったものとみられる。後期以降は湾奥のマガキ主体、汽水のヤマトシジミ主体の貝塚が発達する。

I B. 奥東京湾湾口部 東京湾から入り江状に入り込んだ奥東京湾の湾口部であり、ハマグリ主体の貝塚が形成された点でI A区と、イボキサゴが主体にならない点でI C区と分けられる。この区分は貝塚の貝種から推定される海岸環境によるものである。漁の対象貝種は時期による変化が大きいが、I A区ともI C区とも違った組成となる時期が多いため、あえて中区分を設定した。

I C. 東京湾奥部 真間川低地から養老川低地に至る貝塚分布の中心部である。中期から後期に

はイボキサゴ主体の大規模な貝層が形成される。

ⅠD. 東京湾中央部 大型貝塚の分布の南限であり、集落・貝塚数は少ない。下総台地南端部にあたる。

3 大型貝塚成立以前の動向

(1) Ⅰ期・早期前葉から中葉

図にⅠ期（早期前葉・中葉）、Ⅱ期（早期後葉）の遺跡分布を示した。貝塚は早期前葉に現れたが、当時の遺跡分布の中心から離れていたこと、後葉に貝塚が急増したことが確認できる。

早期前葉 古鬼怒湾水系と九十九里水系の谷の分水嶺付近、図でA~Gとした6つの水系の最奥部・水源地付近に遺跡が集中する。大規模な包含層が形成され、この時期としては住居跡の検出例も多い。この付近に県内最大の遺跡の集中がみられるのは、旧石器時代から続く傾向である。一方、神崎町西之城貝塚と香取市鶴崎貝塚は、いち早く海水が浸入した古鬼怒湾の湾奥部付近に形成されたものである。近年、東京湾湾奥部で見つかった取掛西遺跡もこの時期の貝塚である。

早期中葉 前葉の遺跡分布の中心域のうち、二つの谷の分水嶺付近が残るものの、最大の中心は大須賀川谷水系に移る。印旛沼水系にも散在する。分布は県北東部に明らかに偏っており、東京湾沿岸は著しく希薄である。分水嶺付近から沿岸へのシフトがみられるものの、時期の明確な貝塚は城ノ台貝塚のみであり、海産資源が積極的に利用された痕跡は認められない。

(2) Ⅱ期・早期後葉

早期後葉に様相は大きく変化する。遺跡の分布は明らかに拡大し、印旛沼周辺と東京湾沿岸を中心として沿岸部への展開が特徴的に見られる。炉穴群と遺物包含層が広域に点在して遺跡群を形成するのが特徴である。炉穴のおびただしい重複例などから、頻繁な移動・回帰が想定されている。貝層を形成する例も急増し、貝類の食糧化が一般化したことを示している。貝層は小規模なものが多く、貝以外の遺物はほとんど混じらないのが一般的である。魚の利用は低調であったらしい。た

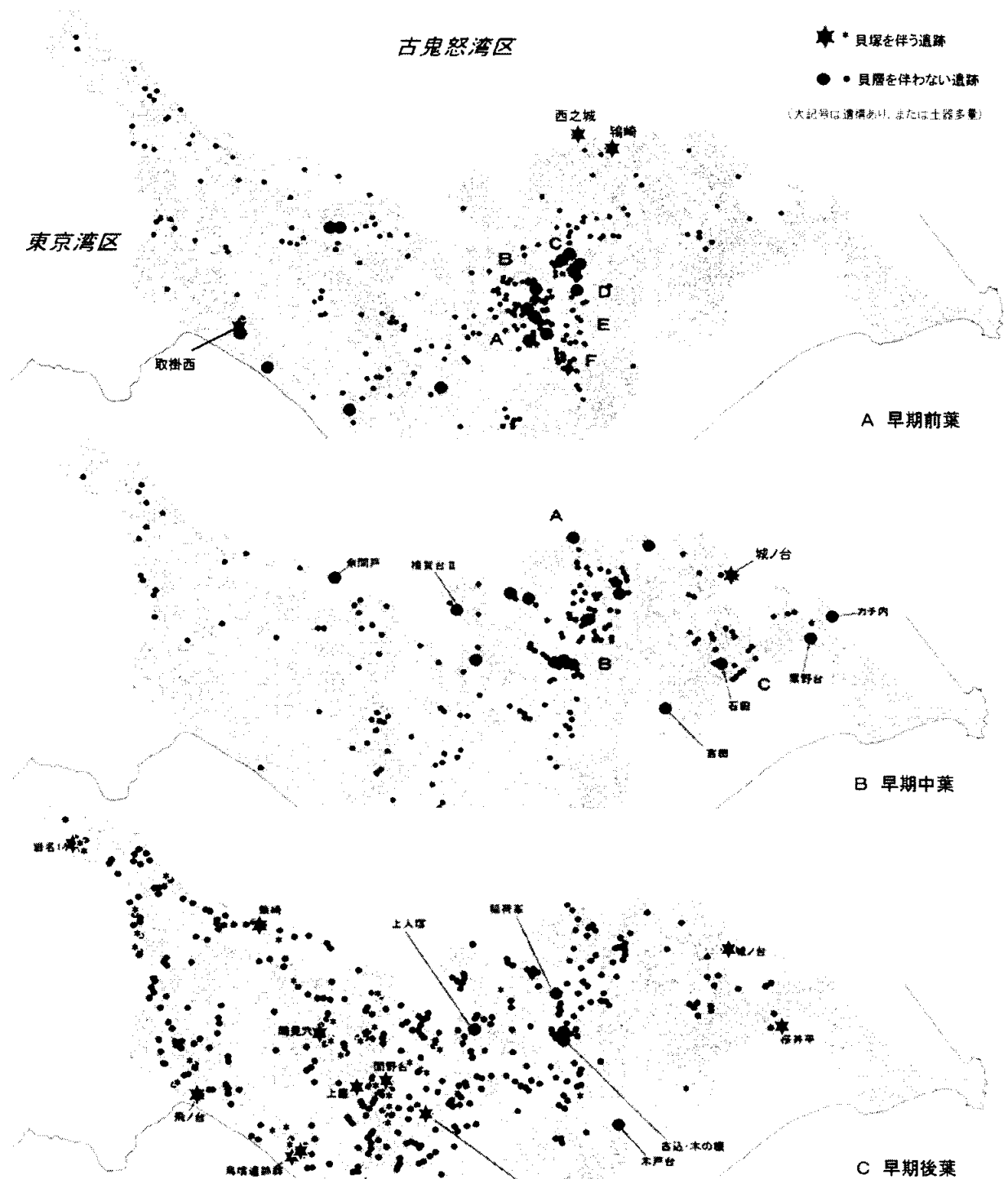
だし、東京湾沿岸に距離をおいて点在する拠点的な集落においては、比較的規模の大きな貝層を形成し、また、比較的豊富に魚骨を含む例がみられる。船橋市飛ノ台貝塚と市原市天神台遺跡がその代表例であり、未分析で動物資源利用の実態が不明な千葉市鳥喰台遺跡群を含めて3大集落といえることができる。いち早く河口干潟が形成された水系に拠点的な集落がつくられたのであろう。

また、この時期は、植物食や粉食（粒食）が一般化する傾向も見られる点でも注目される。磨石類と石皿、小形の打製石斧・礫石斧等の出土例がかなり多くなる。例えば、野田市岩名第14遺跡では、磨石類と小型の打製石斧・礫斧が数多く見つかり、貯蔵穴の可能性のある「小堅穴」も存在する。植物食の拡大は、土器の使用開始からかなり遅れて、食糧化技術の発達を経て、千葉県域ではこのころから顕在化していったものと考えられる。

早期後葉は、落葉広葉樹中心の豊かな森林の形成と、海進による資源量の多い内海の干潟形成を背景に、貝類と植物質食材の利用が活発化したものとみられる。引き続き狩猟も盛んに行われていたらしい。石鏃やその製作に関わる剥片類が目立つ時期といえるからである。貝層中には獣骨が混じらないが、単純に狩猟活動の実態を示すものとは考えにくい。こうした異なる食資源の利用に伴う居住地の移動が、頻繁な移動・回帰を想定させる遺跡分布に現れている可能性がある。

(3) 県南地域の早期の動向

今回は分布図外になってしまったが、県南にも湊川低地の富津市・春日山貝塚、平久里川低地の館山市・稲原貝塚、谷向貝塚などの重要な遺跡が点在する。いずれもマガキ・ハイガイ主体の貝層で、貝類の採取と狩猟の時期がずれている可能に魚骨や獣骨が多数入っていた。また、近年、西上総地域（市原市・君津郡域）の分布図が公表され、養老川・小櫃川河口付近の台地上に早期の遺跡が濃密に分布することが明らかになった（田中2015）。早期後葉には、袖ヶ浦市域にとくに遺跡が集中し、中六遺跡・寒沢遺跡には大規模な炉穴



群が形成されている。両遺跡は貝層も伴っており、中六遺跡は早期中葉・子母口式に遡る。

(4) III期：前期から中期前葉前期 (IIIa~IIId 期)

集落・貝塚の分布は県北西部に圧倒的な集中があり、他の地域には少ない。集中域は、奥東京湾（狭義の奥東京湾と古入間湾）を囲むように存在した広域遺跡群の一部といえ、海進により近接した古鬼怒湾最奥部の古常陸川谷、手賀沼低地北部

にも連続していた。前期のみ、東京湾周辺の広域の分析成果がある（西野・植月 2003、西野 2009）ので、遺跡分布や資源利用について概観したい。奥東京湾東岸（県北西部地区）については遺跡分布の詳細な分析成果もある（上守 2009）。

Ⅲa：前期初頭・花積下層式期 集落自体は少ないが、古入間湾湾奥、見沼低地、元荒川低地、坂川低地、多摩川・鶴見川低地と、湾奥干潟・湿地を形成した大きな水系に、それぞれ1つないし2つの拠点集落が存在したらしい。「特定集落への求心的、集約的な居住形態」（小川 2001）が想定できる。下総台地では幸田貝塚、二ツ木向台遺跡、駒形遺跡などがある。

Ⅲb：前期前葉・関山式期 奥東京湾に分布の中心が形成される。拠点的な集落が若干増えるが、大きな変化は小規模な集落が増加した点にある。古入間湾湾奥・見沼低地・綾瀬川谷・元荒川低地に顕著である。台地でいうと大宮台地と、その対岸・武蔵野台地の富士見市付近である。一方、下総台地では集落は増加せず、幸田貝塚の拠点的な性格がより強まる。

Ⅲc：前期中葉・黒浜式期 奥東京湾西岸の貝塚群は前代の傾向を引き継ぐが、分布がやや拡大し密度も濃くなる。下総台地は分布域が大きく広がり、4つのまとまりを形成する。貝塚の分布は西岸よりも稠密となり、遺構内貝層を形成する例が多い。幸田貝塚のような突出した集落はなくなり、住居が数軒から数十軒という集落が数多く現れる。野田市楨内貝塚、流山市若葉台遺跡、我孫子市柴崎遺跡・西大作遺跡は広場集落である。野田市飯塚貝塚、市川市庚塚貝塚、船橋市飯山満東遺跡などの規模の大きな集落は、Ⅲd 期に継続する。

Ⅲd：前期後葉から末葉 後葉には、現東京湾西岸の目黒川谷、多摩川・鶴見川低地付近に大きな分布の中心が形成される。これまで分布が濃密だった奥東京湾西岸と東岸は減少に転じ、とくに東岸に顕著である。坂川谷には貝塚がなくなり、真間川・海老川低地には残る。海退の影響による退潮傾向と海側へのシフトであろう。

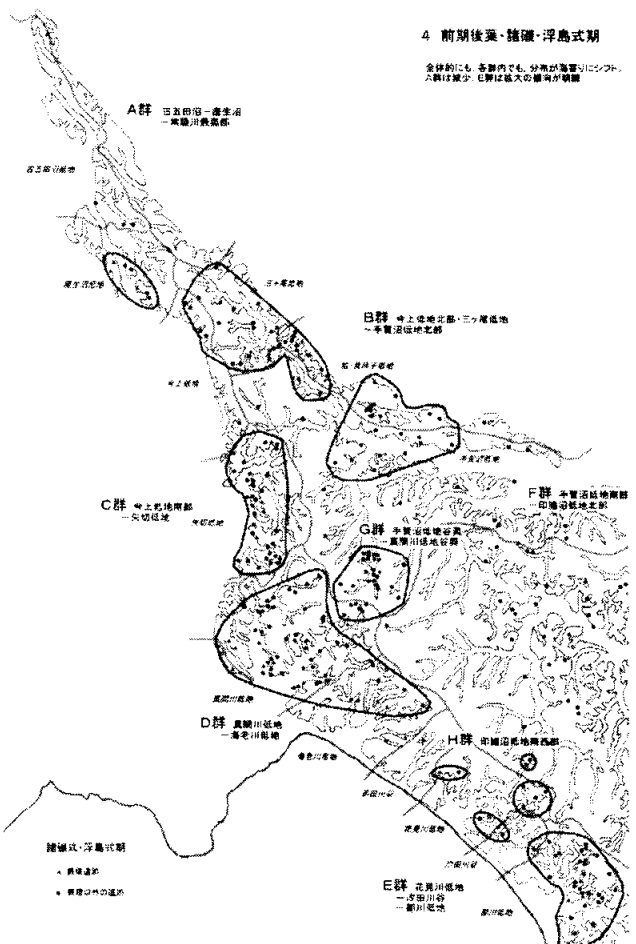
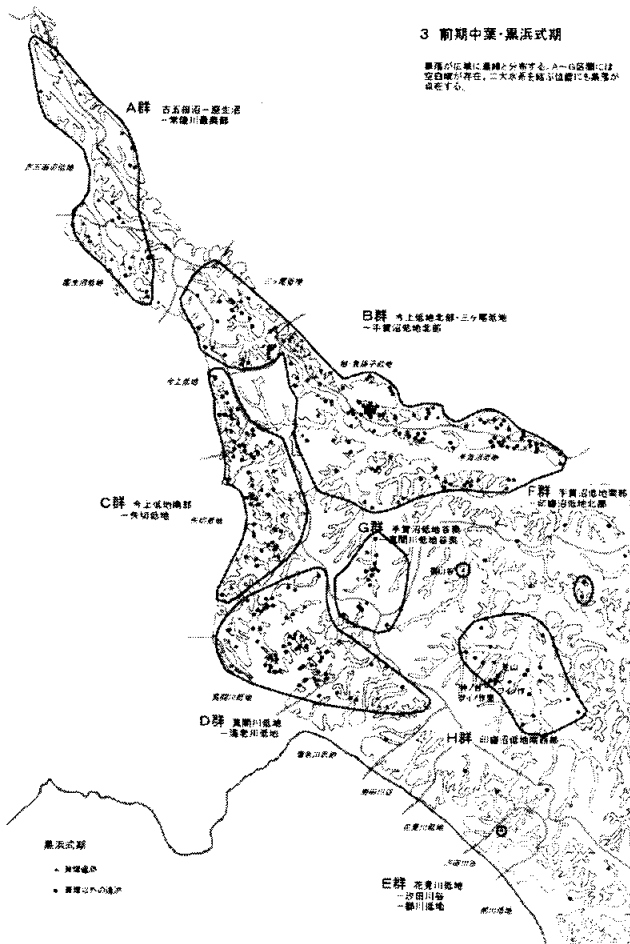
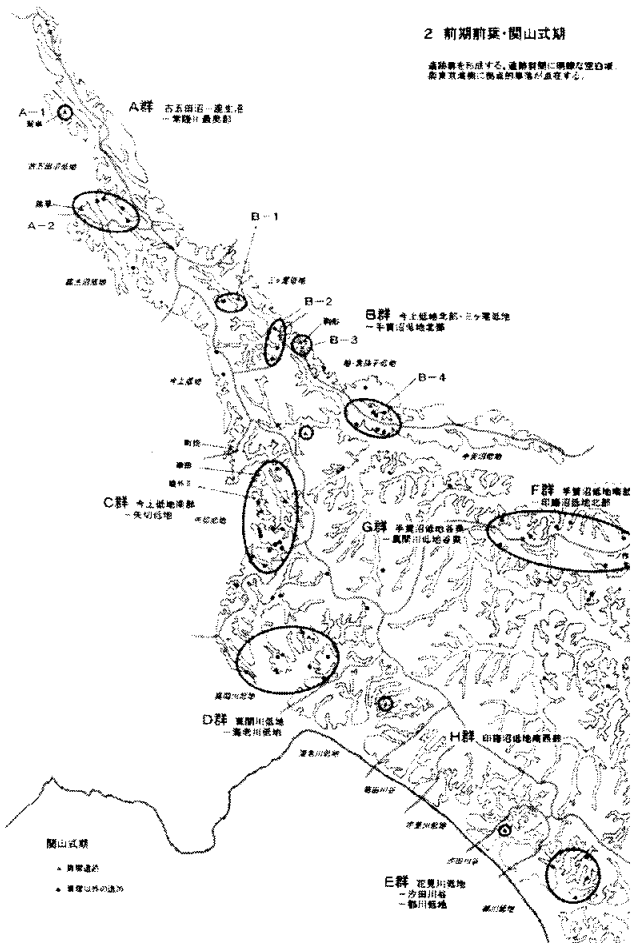
関東広域で貝塚の増減をみると、前期初頭：少ないがいくつかの地域に集中→前期前葉：奥東京湾湾奥部に増加→前期中葉：さらに増加し、分布が奥東京湾湾口部、東京湾西岸まで拡大→前期後葉：奥東京湾は減り、東京湾に中心→前期末葉：激減といった変化をたどる（松田 2006）。県別にみると、大半は中葉にピークをもつ相似形だが、沿岸部の神奈川・東京は後葉にピークをもっており（松田 2006）、やはり干潟の拡大やその後の海退現象に調和的である。古入間湾、奥東京湾、古鬼怒湾という3大内湾が近接して存在したことが、前期に集落や貝塚が集中する大きな理由であり、海退の影響を受けて生活の拠点が海側にシフトしていったものとみられる。

現東京湾域 中期に大型貝塚群を形成する都川以南に前期貝塚の形成が低調である理由は、この時期の海底地形をみると頷けるところである。海進初期には、この地域には現在よりもかなり沖側に台地がせり出していたのであり、現在の村田川～小櫃川河口付近の台地は、海岸線から遠く離れていた。侵食されて失われた台地に貝塚が存在した可能性は否定できないが、干潟の発達には湾奥に比べてもさらに遅れたことが想定されることから、この時期の水産資源の活発な利用を見込むことはできない。

なお、現在、千葉県教育振興財団で実施している柏たなか駅周辺の広域の発掘調査では、早期後葉から前期後葉まで連綿と広がる県内最大規模の集落群を調査・整理中である。

中期初頭～前葉（Ⅲe 期）

五領ヶ台期～阿玉台Ⅱ式期にあたる。奥東京湾沿岸に圧倒的に集落・貝塚の分布が集中していた前期後葉までとは異なり、古鬼怒湾水系に中心が移った。現在の利根川下流域や霞ヶ浦周辺で、県内では小野川・黒部川水系に大型貝塚群を形成する。香取市向油田貝塚・三郎作貝塚・木之内明神貝塚・阿玉台貝塚・白井大宮台貝塚が代表であり、一部はⅣ期まで継続する。



千葉県北西部における縄文前期の集落と貝塚の変遷

(5) III期の生産・居住様式

前期初頭・前葉の大規模集落 幸田貝塚は、III a～III b 期の最大規模の集落である。遺構群は環状構造をもち、これまでに154軒の住居跡が見つかっている。住居跡内貝層70か所と、比較的規模の大きい面状貝層をもち、貝層の形成。貝層はハマグリ・ハイガイを主体とし、面状貝層からはイノシシ・シカや、マダイを中心とした大形魚の遺体が多数出土している。この時期の集落のなかでは、貝層の規模や大型獣・魚骨の出土量が突出している。また、磨石類が比較的多く、植物食も一定の割合を占めていたと推定される。このような傾向は、IV期（中期中葉）の大型貝塚形成期のあり方に近い。

しかし、一方で住居跡に建て替えや規模の変更直接貝層を形成する例が多いことなど明瞭な違いもみられる。定住的な要素と、頻繁な移動・回帰を想起させる要素を併せもつといえる。

中期中葉・前葉の大型貝塚 黒部川水系の大型貝塚は、大規模な斜面貝層の調査が行われ、貝類採取と魚類の網漁・刺突漁が盛んに行われたことが判明している。海産資源の活発な利用は、IV期の東京湾沿岸の大型貝塚群に引き継がれる。ただし、台地上に環状構造の遺構群が存在した可能性は低く（台地上の調査例が乏しいが、トレンチ調査が行われた白井大宮台貝塚では、IV期の小竪穴が検出されたものの、III期の遺構は皆無であった）、石器がきわめて乏しいなど、生産活動も大きく異なっていた可能性が高い。

4 堀越正行「加曾利E期の世界観」

大発掘の成果から見てきたことは、堀越正行が1971・72年に発表した文章のとおりであった。

「生活諸般の変化・変質は、下総台地に住む阿玉台式土器使用者たちがひとり孤立して成した自己展開によるものではなく、むしろ外部的な強い影響によるものと考えられる。東京湾沿岸下総台地に強い影響を与えたのは、武蔵野台地や大宮台地に展開していた文化と判断される。それはいうまでもなく勝坂式土器から抜け出し、加曾利E式

土器群の先駆的原型を形成した原加曾利E式土器を共有する人々のもつ文化である。」「馬蹄型貝塚の東京湾ベルト地帯において典型的に発達した加曾利E期の世界観は、武蔵野台地に住む一部の勝坂式土器使用者たちの精神的行動様式の中から生成したものであることが予想されるのである。」「東京湾沿岸下総台地において展開された加曾利E期の生活は、先行する阿玉台期の生活がそのまま継承されたものでもないし、西方の勝坂期の生活がそのまま持ち込まれたものでもない。阿玉台期の生活形態と勝坂期の生活形態が融合した第3の生活形態なのである。貝塚を残した集落のいくつかは、先住の阿玉台式土器使用者と移住した勝坂式～原加曾利E式土器使用者との共住をみ、やがて混血一体化の道をたどったと思われる。」

5 県内縄文貝塚出土動物遺体組成概要

県内の貝塚から得られた動物遺体は膨大なものであるが、時期・地域的な比較研究に耐えるデータは以外に少なく、今後の積み重ねが必要である。そのことを承知の上で、各時期の代表的な分析例をつぎはぎしてみると、次のようなことがいえるだろう。

I期： 鶴崎貝塚の貝層で比較的大型獣・魚骨が豊富

II・III期： 貝層に骨を含まないのが普通だが、①一部の遺構で集中する例、②低地遺跡で魚骨が多い例、③比較的安定して出土する例もある。IV期よりも大型魚の割合が多く、刺突漁等を想定できる。

IV期： VI期以降に比べて量は多くないが、貝層から安定して骨が出土する。魚は小型魚主体であり、土器片錘をつけた網での漁が盛んであったと考えられる。内湾漁撈のみ

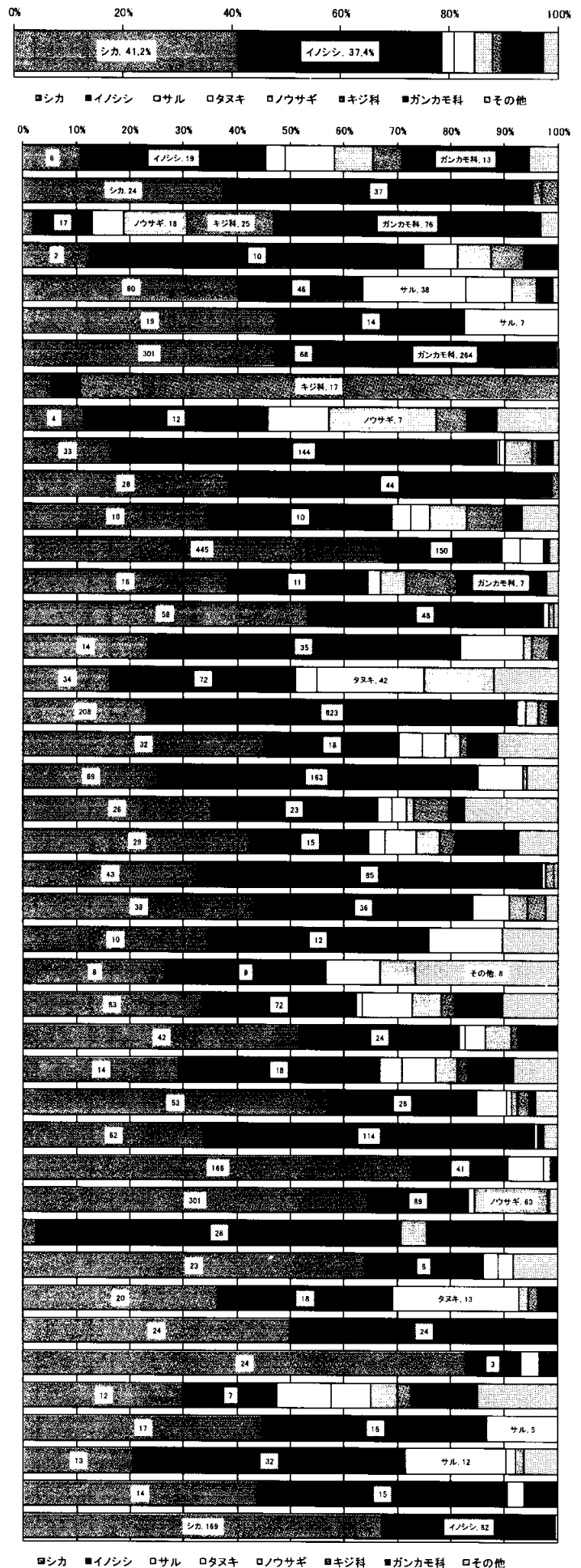
V期： 貝層に骨を含まない。湾口部で外洋・岩礁域の漁が行われる。

VI期： IV期に似るが遺跡間の差が大きく、一部湾口部の影響を受ける。

VII・VIII期： シカ・イノシシの順に多く、小動物や魚は少ない。

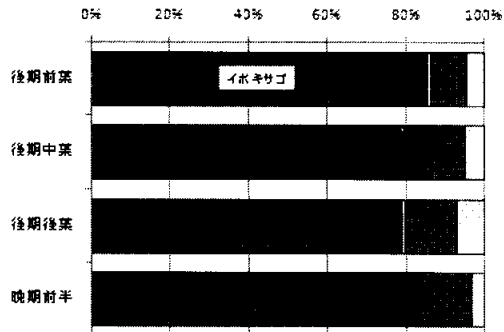
千葉県内縄文貝塚出土の動物遺体組成

水系1	水系2	遺跡名	主な時期	シカ	イノシシ	サル	タヌキ	ノウサギ	キジ科	ガンカモ科	その他	合計
千葉県	今上等地	中野久木谷頭	中期中葉	6	18	2	5	4	3	13	3	55
千葉県西側	矢切低地	幸田貝塚	前期	24	37			1	2		0	64
	矢切低地	上本郷貝塚	中期中	3	17		9	18	25	76	5	153
	矢切低地	貝の花貝塚	中期末	2	10	1		1	1	1	0	16
	矢切低地	貝の花貝塚	後期	80	46	38	17	9	1	5	2	198
	矢切低地	貝の花貝塚	晩期	19	14	7						40
千葉県東側A	真間川低地	炭塚	前期中・後	301	68	1		2		264	3	639
	夕田川谷	谷津台貝塚	前期中・後	1	1				17		0	19
	真間川低地	紙敷貝塚	中期中	4	12		4	7	2	2	4	35
	真間川低地	向台貝塚	中期中	33	144	1	2	10	2	6	2	200
	真間川低地	曹谷貝塚	後期	28	44				1		0	73
	真間川低地	中沢貝塚	後期	10	10	1	1	2	2	1	2	29
	海老川低地	古作貝塚	後期	445	150	22	29	2	3	3	11	665
海老川低地	宮本台貝塚	後期	16	11		1	2	4	7	1	42	
千葉県東側B	村田川低地	神門	前期～中前期	58	48		1	1			1	109
	藤川低地	加曾利北貝塚	中期中	14	35		7	1	2	1	0	60
	村田川低地	有吉北貝塚	中期中	34	72	8	42	27			25	208
	村田川低地	草刈貝塚	中期中	208	623	14	21	17	14	3		900
	市原低地	西広貝塚	中期末～後期	32	18	3	3	2	1	4	8	71
	市原低地	武士	中期末～後期	69	163	1	23	2			16	274
	藤川低地	加曾利南貝塚	後期	26	23	2	2	1	5	2	13	74
	藤川低地	矢作貝塚	後期	29	15	2	4	3	2	8	5	68
	藤川低地	多部田貝塚	後期	43	85		1	2			1	132
	村田川低地	木戸作貝塚	後期	38	36		6	3	3		2	86
千葉県東側C	市原低地	上小貝塚	後期	10	12		4				3	29
	市原低地	亥の海濱貝塚	後期	8	0		3	2			8	30
	市原低地	祇園原貝塚	後期	83	72	3	23	14	6	22	26	249
	市原低地	西広貝塚	後期中	42	24	1	3	4	1	6	0	81
	市原低地	上高根	後期中	14	18	2	3	2	1	4	4	48
	藤川低地	内野1	後期中～後期	53	26	5	1	1	2	1	4	93
	市原低地	西広貝塚	後期	62	114	1		1	1	5		184
千葉県外側	湊川低地	富士見台貝塚	後期中	166	41	15	3		1	2	0	228
	嶺山湾南岸低地	蛇切洞穴	後期	301	89	5	1	63	1	1	7	468
千葉県南側	千原低地	布瀬貝塚	中前期	1	28			2		10	0	41
	長沼低地	荒海川表	後期	23	8	1	1				3	36
千葉県中央～河口	大湊川低地	輪崎貝塚	前期	20	18		13	1	1	2	0	55
	藤川低地	城ノ台貝塚	前期中・後	24	24						0	48
	藤川低地	栗島台	前期～中	24	3		1				1	29
千葉県北側	藤川低地	大倉貝塚	後期	12	7	4	3	2	1	5	6	40
	神海低地	桜井平	前期	17	16	5					0	38
	真間川低地	新田野貝塚	前期	13	32	12	1	1			4	63
	栗山川低地	境貝塚	中期末～後期	14	15		1				2	32
千葉県北側	栗山川低地	山武姥山貝塚	後期	169	82		1				0	252
	合計			2579	2339	143	233	213	108	464	177	6256
%			41.2%	37.4%	2.3%	3.7%	3.4%	1.7%	7.4%	2.8%	100.0%	

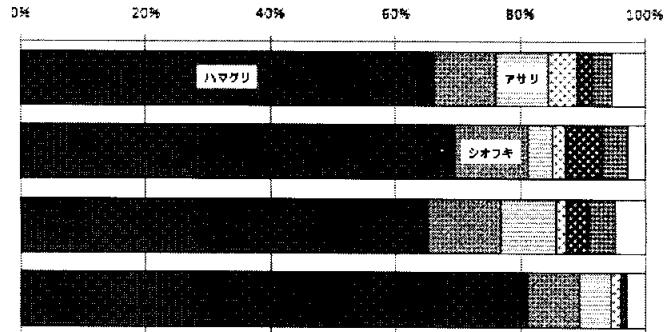


7 西広貝塚のデータ

全体の組成



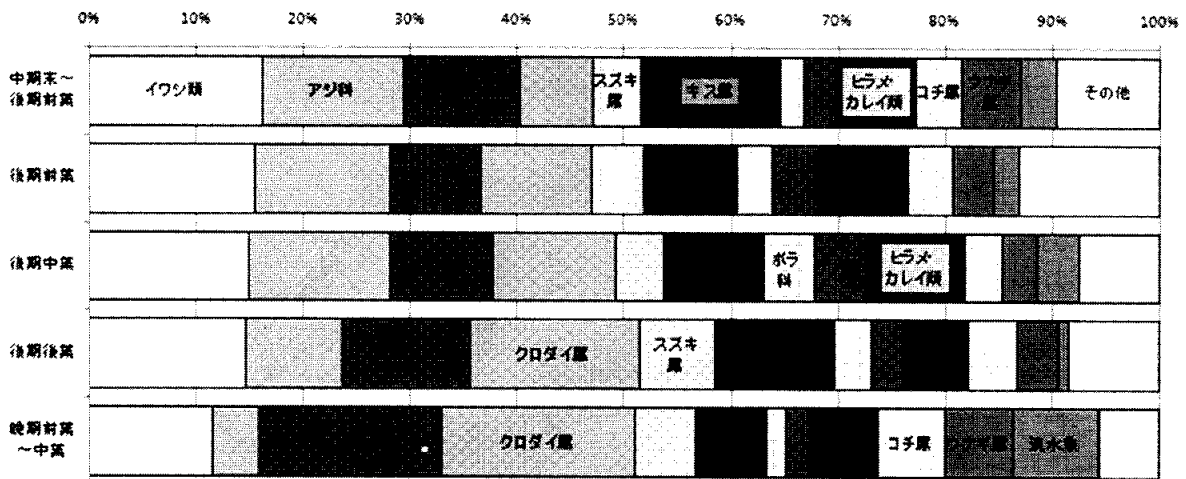
イボキサゴとその混雑種を除いた組成



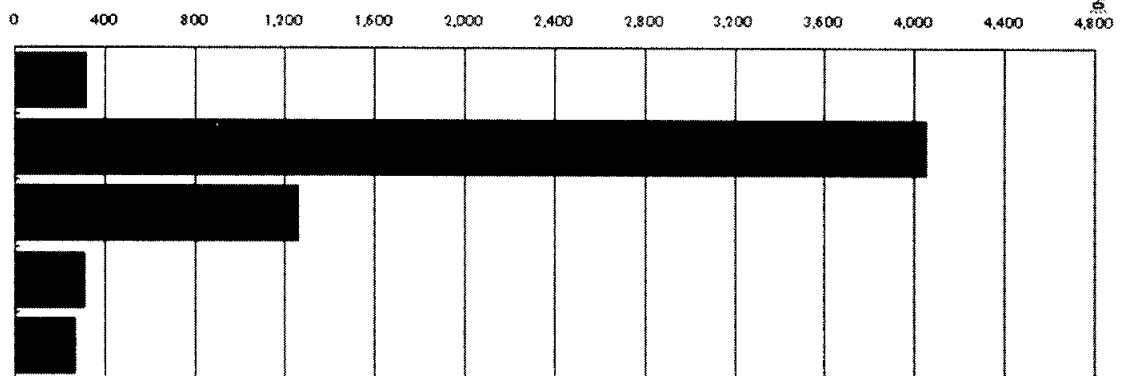
■イボキサゴ ■アラムシロ ロウミナ科 ■ハマグリ □その他

■ハマグリ □シオフキ □アサリ □ロツメタガイ ■マガキ ■マテガイ □その他

貝種組成

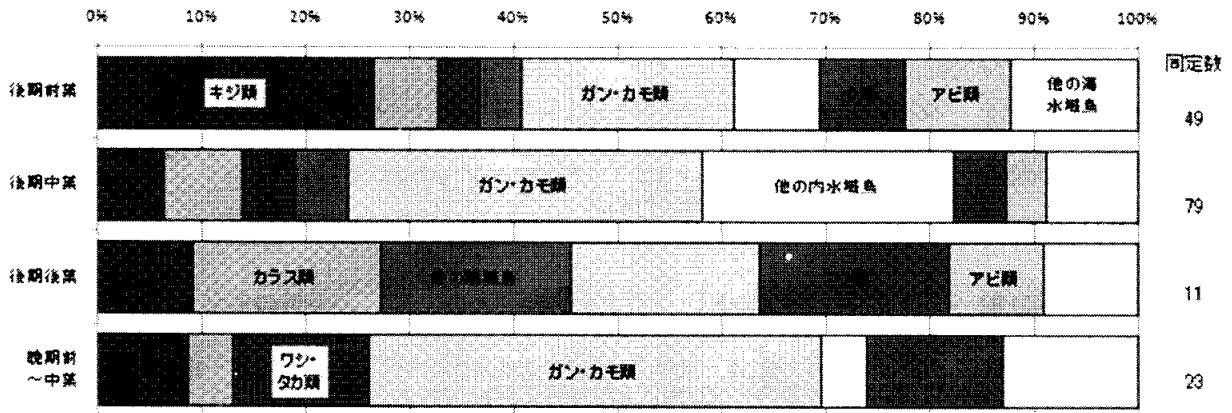


A 時期別魚類組成(%MND)



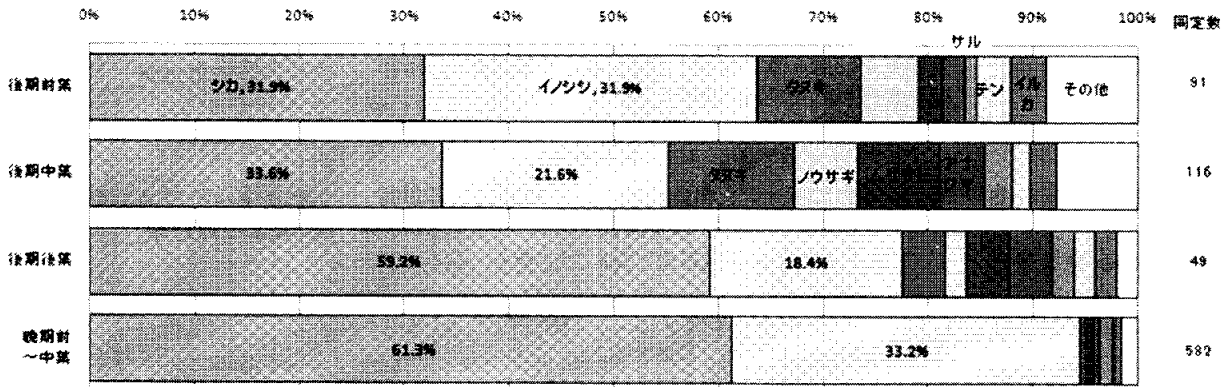
B 時期別魚類出土量(MND)

魚類出土量と魚種組成

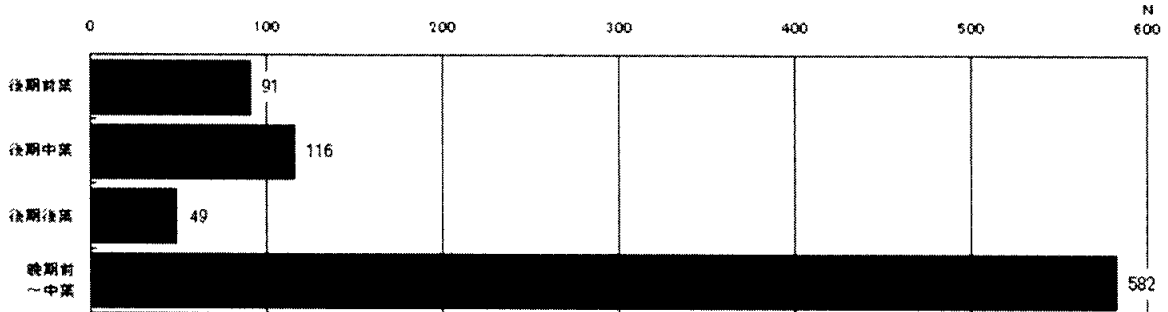


時期別鳥類出土量(MND)

鳥類種組成



哺乳類種組成(MND)



時期別哺乳類出土量(MND)

哺乳類出土量と種組成

貝塚論の系譜

貝塚とは、大型貝塚とはなにか？ 以下のような考えが提示されてきた。

1887	上田英吉	千葉市付近は大貝塚が一続きの集落をなすように見える。海産・陸産両方の資源が豊かで便利だったからであろう	大型貝塚群＝集落群説
1888	坪井正五郎	貝塚とは掃き溜めであり、貝殻がとくに多いものを指す	掃き溜め説
1915	江見水蔭	貝塚は専門的に貝類をとってムキミとし諸方面に送ったものであり、居住の場でもあったとする	むき身・干し貝説
1926	直良信夫	貝殻は損傷が少ないと生身を取り出す「むきみ説」を批判。土器で加熱して身を取り出したと推定	
1927	後藤守一	貝塚は、はきだめだが、近くに墓地が存在していた	
1928	鳥居龍蔵	貝層の大小は時間の長短、人員の多少を示すもの	日常消費説
1935	田沢金吾	貝塚はごみ捨て場だが、貝層部分以外に目を向けるべき。環状貝塚は住居跡への貝の廃棄が台地上を巡ってできた	環状貝塚＝環状集落
1935	河野広道	貝塚は物送りの場。ごみ捨て場ではない、という初の論考	物送り場説
1941	ジェラード・グロート	石器人は愛する死者の墓場として貝塚を選んだ。ただの尊いところでなく、宗教上の聖なるところ	聖地説
1958	和島誠一	貝のない中央部の社会的な機能を指摘。大型貝塚は集落であるという明確な考えを示した	大型貝塚＝集落説
1960	芹沢長介	大規模な貝層は時間の長さを示すとした	日常消費説(存続期間説)
1960	麻生優	馬蹄形貝塚は住居の分布が必然的にもたらしたもの	貝塚内集落説
1962	酒詰仲男	貝塚集落は海産物の市場。海陸交通の要衝に当たり物々交換が行われた地域を代表するむら	大型貝塚＝市場説
1962	坪井清足	大規模貝塚群＝多くの人口＝を支えたのは、採集狩猟漁撈に加えて、後背地で農業が行われたのでは	一部農耕説
1973	後藤和民	大型貝塚の貝類は欠乏物資との交換財。周囲の集落が共同で干し貝加工を行った。土器製塩の開始により下火になっ	大型貝塚＝干貝加工場説。集落内貝塚説
1973	楠本政助	アサリの干貝が長期保存可能であることを実験で証明	
1974	堀越正行	後藤説を肯定。貝殻に損傷がないのは茹で干しにしたから。貝殻上での焚火が後期に集中することに注目	
1976	鈴木正博・渡辺裕水	大型貝塚の消滅は、製塩の開始でなく、海退によって貝が採れなくなったから	干し貝加工場説に疑問
1979	鈴木公雄	貝類は利用効率の低い食材であり、大量に採取しなければ必要な食糧としての量を確保できなかった	質より量説
1982	今井公子	大型貝塚の中央凹地の形成やキサゴや小ハマグリばかりの状況から干貝加工場説に疑問を唱えた	干し貝加工場説に疑問
1984	鈴木素之	前期貝塚を検討。貝は、他の食料が不足して生業形態が崩れた場合、不足分を補う非常食	非常食説
1985	後藤和民	貝塚論の系譜を紹介。大型貝塚は干し貝加工等の共同作業や共同祭祀を行った集落結集の場として特殊性を強調	
1985	堀越正行	大型貝塚では後期中葉に貝層形成が不活発になる。製塩開始は後期後葉であり、後藤の大型貝塚消滅原因説を否定	
1996	阿部芳郎	当時の砂浜に形成された「ハマ貝塚」と、集落の内部に形成された「ムラ貝塚」の両者が存在する	
1999	西野雅人	中期大型貝塚は加工場のイメージはうすく、一年を通じて集落に運び込んでいる。植物食の安定が貝の需要を高めた	調味食材説。干し貝加工場に反論
2000	阿部芳郎	東京湾東岸の大型貝塚で干し貝と石器石材が交換された証拠は見当たらず、干し貝加工場説は見直しが必要	干し貝加工場に反論
2001	西野雅人	環状集落が周辺の小規模な集落の共同作業場であるという図式は成立しない	大型貝塚＝共同施設説に反論

参考文献

あ

- 赤澤威・南川雅男 1989「炭素・窒素安定同位体に基づく古代人の食生活の復元」『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』クバプロ
- 足立拓朗 1992「千葉県内における縄文時代の落とし穴について」青山考古 10
- 阿部芳郎 1987「縄文中期における石鏃の集中保有化と集団狩猟編成について」貝塚博物館紀要 14
- 阿部芳郎 1991「狩猟具としての石器—縄文時代における石鏃の集団保有と狩猟活動—」季刊考古学 35
- 阿部芳郎 2000「縄文時代の生業と中里貝塚の形成」『中里貝塚』北区教育委員会
- 阿部芳郎・建石徹他 2000「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造—印旛沼周辺遺跡群の踏査と研究の成果—」駿台史学 109
- 今村啓爾 1976「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例との比較」物質文化 27
- 今村啓爾 1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』六興出版
- 岩瀬彰利 2003「縄文時代の加工場型貝塚について—東海地方における海浜部生業の構造—」関西縄文時代の集落・墓地と生業 関西縄文論集 1
- 植月学 2000「縄文時代後期における貝類採集活動の空間的構造」史観 142
- 植月学 2001「縄文時代における貝塚形成の多様性」『文化財研究紀要 14』東京都北区教育委員会
- 枝村俊郎・熊谷樹一郎 2009「縄文遺跡の立地性向」GIS—理論と応用 17-1
- 大泰司紀之 1983「シカ」『縄文文化の研究 2 生業』雄山閣
- 小笠原永隆他 1998『千葉東南部ニュータウン 19—千葉市有吉北貝塚 1 (旧石器・縄文時代)』千葉県文化財センター
- 岡本勇・戸沢充則 1965「関東」『日本の考古学 II 縄文時代』河出書房新社
- 小川岳人 2001『縄文時代の生業と集落 古奥東京湾沿岸の社会』
- 小川岳人 2012「関東地方の縄文集落と貝塚」『シリーズ 縄文集落の多様性 III 生活・生業』雄山閣
- 小倉和重 2011「縄文時代中期、阿玉台式後半期の諸様相—千葉県四街道市南作遺跡の分析を通じて—」印旛都市文化財センター研究紀要 8
- ### か
- 加藤博文 1996「黒曜石利用から見た東関東縄文時代中期の動態」『笠間市西田遺跡の研究』
- 金子浩昌・川戸彰他 1961『印旛・手賀沼周辺埋蔵文化財調査報告書 (本編)』千葉県教育委員会
- 加納実 1989「千葉県における加曽利 E 式土器後半の様相」『縄文中期の諸問題』

- 加納実 1994「加曽利 E III・IV 式土器の系統分析」貝塚博物館紀要 21、千葉市立加曽利貝塚博物館
- 加納実 1995「下総台地における加曽利 E III 式期の諸問題—集落の成立に関する予察を中心に—」研究紀要 16 千葉県文化財センター
- 加納実 2000「集落的居住の崩壊と再編成—縄文中・後期集落への接近方法—」先史考古学論集 9
- 上守秀明 2009「千葉県北西部地区を主とした縄文前期遺跡の分布と駒形遺跡における生産活動」『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書—柏市駒形遺跡—縄文時代以降編 1』千葉県教育振興財団
- 金子浩昌・鶴岡英一 2007「動物遺存体から見た生業活動」『市原市西広貝塚 III』市原市教育委員会
- 祇園貝塚調査団 1970『祇園貝塚 発掘調査概報』千葉県教育委員会
- 後藤和民 1970「原始集落研究の方法論序説」駿台史学 27
- 後藤和民 1973「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』雄山閣
- 後藤和民 1974「社会と集落」『千葉市史 原始古代中世』
- 小林清隆 2006「環状集落の形成期における弓矢猟」千葉縄文研究創刊号
- 小宮孟 1989「千葉県における縄文初期のイヌ」千葉県中央博物館研究報告—人文科学—1
- ### さ
- 佐藤宏之 1989「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌』六興出版
- 設楽博己 2004「再葬の背景 縄文・弥生時代における環境変動との対応関係」国立歴史民俗博物館研究報告 112
- 柴田徹・山本薫 2000「石鏃に使用された石材の石室組成に関する分析」『日本考古学協会第 66 回総会研究発表要旨集』
- 鈴木正博・渡辺裕水 1976「関東地方における所謂縄文式「土器製塩」に関する小論」常総台地 7
- ### た
- 高橋誠 1999「鹿島川中流域における縄文時代集落と貝塚」坂戸念仏塚西遺跡 印旛都市文化財センター
- 建石徹・津村宏臣 2003「黒曜石資料の原産地推定とその空間的展開に関する予察：千葉県域の縄文時代中期資料を中心として」Archaeo-Clio Vol. 4
- 田中大介 2015「西上総地域における縄文時代早期の遺跡分布について」袖ヶ浦市史研究 17
- 鶴岡英一・忍澤成視他 2007『市原市西広貝塚 III』市原市教育委員会
- 樋泉岳二 1999「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」国立歴史民俗博物館研究報告 81
- 樋泉岳二・保坂太一・山谷文一 2000「中里貝塚における人間の活動」『中里貝塚』北区教育委員会

- 樋泉岳二 2013「動物資源利用からみた縄文後期における東京湾東岸の地域社会」動物考古学 30
- な
- 中村信博 1998「溝型陥し穴研究序説」栃木県考古学会誌 19
- 西川博孝 1999「草刈貝塚出土の叉状腰飾りについて」研究連絡誌 54、千葉県文化財センター
- 西野雅人 1999「縄文中期の大型貝塚と生産活動—千葉県有吉北貝塚の分析結果—」『研究紀要 19』千葉県文化財センター
- 西野雅人・植月学 2003「動物遺体による縄文前期前葉の生業・居住様式の復元」松戸市立博物館紀要 10
- 西野雅人 2004「貝塚」『千葉県の歴史 資料編考古 4 遺跡・遺構・遺物』千葉県
- 西野雅人 2005a「東京湾東岸の大型貝塚を支えた生産・居住様式」『地域と文化の考古学 I』明治大学文学部
- 西野雅人 2005b「縄文時代の通年定住型集落を支えた食—植物の発達と貝・小魚の通年利用—」『研究紀要 24』千葉県文化財センター
- 西野雅人 2008「縄文中期拠点集落の消滅と小規模集落」千葉縄文研究 2
- 西野雅人・樋泉岳二・岩瀬彰利 2008「関東と東海の晩期貝塚」『日本考古学協会 2008 年度大会「縄文時代晩期の貝塚と社会」発表要旨』
- 西野雅人 2009「関東地方南部における縄文早・前期の古海況と貝塚形成」千葉縄文研究 3
- 西野雅人 2012「縄文中期「腰飾」出現の背景」千葉縄文研究 5
- 西本豊弘 1991「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」古代 91
- 野口行雄 1985「房総半島における縄文時代生産活動の様相」研究紀要 9
- は
- 長谷川豊 1995「縄文時代におけるシカ猟の技術的基盤についての研究—静岡県・大井川流域の民俗事例調査から—」静岡県考古学研究 27
- 長谷川豊 1996「縄文時代におけるイノシシ猟の技術的基盤についての研究—静岡県・大井川上流地域の民族事例調査から—」動物考古学 6
- 長谷川豊 1998「縄文時代における狩猟犬の研究—その機能的側面について—」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 春成秀爾 1999「下顎骨製搔器 獣皮の加工について」国立歴史民俗博物館研究報 77
- 堀越正行 1971「加曾利 E 期の世界観 (II)」加曾利貝塚博物館紀要 4
- 堀越正行 1972「加曾利 E 期の世界観 (III)」加曾利貝塚博物館紀要 5
- 堀越正行 1983「貝器」『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣
- 堀越正行 1983b「谷奥貝塚の意味するもの」史館 15
- ま
- 松田光太郎 2006「縄文時代前期の東京湾における漁撈の様相」神奈川考古 42
- や
- 山田康弘 1995「多数合葬例の意義—縄文時代の関東地方を中心に—」考古学研究 42-2
- 米田 穰 1999「炭素・窒素安定同位体比に基づく食性復元」『向台貝塚資料図譜』市立市川考古博物館
- わ
- 渡辺新 1991『縄文時代の人口構造 千葉県権現原貝塚の研究 I』
- 渡辺新 1994『多数人骨集積の類例追加と雑感』
- 渡辺新 2006「—市川市姥山貝塚接續溝第 1 号竪穴— 5 人の死体検案」千葉縄文研究 1
- 渡辺新・西野雅人 2006「骨角貝製「腰飾」—籠状鯨類下顎骨製品・環状イモガイ製品—」千葉縄文研究 1
- 渡辺新 2015「「人骨集積」—東京湾東岸における後期前半の事例—」季刊考古学 130
- <古海況に関する文献>
- 貝塚爽平・阿久津純他 1979「千葉県の低地と海岸における完新世の地形変化 付 都川・古山川合流点付近沖積層の珪藻群集」第四紀研究 17
- 松島義章 1979「南関東における縄文海進に伴う貝類群集の変遷」第四紀研究 17
- 松島義章 1979b「木戸作貝塚周辺の沖積低地」『千葉東南部ニュータウン 7』
- 松島義章 1997「沖積低地の地質」『千葉県の自然誌 本編 2 千葉県の大地』千葉県
- 森脇広 1979「九十九里平野の地形発達史」第四紀研究 18
- 遠藤邦彦・小杉正人・菱田量 1988「関東平野の沖積層とその基底地形」日本大学文理学部自然科学研究所紀要 23
- 遠藤邦彦・小杉正人他 1989「千葉県古流山湾周辺域における完新世の環境変遷史とその意義」第四紀研究 28-2
- 小杉正人 1989 a「完新世における東京湾の海岸線の変遷」地理学評論 5
- 小杉正人 1989 b「珪藻化石群集による古奥東京湾の塩分濃度の推定」第四紀研究 28
- 小杉正人・金山喜昭他 1989「古奥東京湾周辺における縄文時代黒浜期の貝塚形成と古環境」考古学と自然科学 21